

析だが、この項目だけでも非常に分かりやすい。清水は、「それぞれの項目は単独というより、相互に関連しあい相乗的に告知への態度と結びついていた。それぞれの項目において、受療夫婦の役割と責任、社会の役割と責任という視点があり、【情報】【支援者・相談者】【夫との話し合い】【子ども観・親子関係】の順に親の関与する比重が重くなり、逆に社会の比重は軽くなると考えられた。両者の役割と責任が果たされて、初めて子どもの『出自を知る権利』が保障されると考える」¹⁸と指摘している。

筆者は、夫婦の決断に大きく影響を及ぼすのは、情報ではないかと思う。夫婦で話し合うにしても、どういう情報を持っているか、その情報にどのように動かされているのかが、結局は子ども観や親子関係に響いてくるはずである。そして受療夫婦にとって一番影響を受ける情報は医者並びに医療関係者からの情報ではないかと思う。そして今のところ、ほとんどの医者は、「告知をしない」という考え方を持っている。Aさんにしても、Bさんにしても、医師からの情報を鵜呑みにしていることが伺える。

また、長沖は、この研究報告の中で、「子どもに AID で生まれたことを伝えるか」という稿で「最近になって、AID に関連したウェブサイトがでてきたものの、それ以前は情報源のほとんどが医師であり、その医師の多くは子どもに伝えることに否定的なこと、また、これも最近になって親の集まりや、生まれた人の自助グループができ子どもの声が伝えられ始めたが、それまでは自助グループがなく、同じ経験をした他の人の意見や、生まれてきた人の意見を聞く環境がなかったこと、AID を受けることができるのは、戸籍上の夫婦と限定されているため、

養子と異なり、妻が妊娠、出産を行うために隠すことが可能であったこと、勿論子どもに伝えるための絵本もなかったことなどが考えられる」¹⁹と述べている。

「出自を知る権利」を法制化した国でも、告知することを奨励はしても、法律で規定してはいない。告知は最終的には夫婦に決定権がある。「告知しない」という選択も許されることではある。しかし、せめて配偶子・胚の提供による治療を行う前にその説明として、告知をすることのメリットとデメリットを並列して説明してもらいたいし、医師たちに告知への関心を高めてもらいたいと望むものである。

4. 出自を知る権利とは

まず、出自とは何であろうか。通常どんな生まれ方をしようと子どもにとって、自分は誰と誰の間に生まれたのか？どんな風に生まれたのか？そして今の親子関係は確かな信頼によって結びつき、そして互いが死を迎えるまで継続されるものなのか？と、意識的ではないかもしれないが、しかし常に心の中で問いかけているものである。それが自分にとって最も大きな問題として意識させられるのが、思春期から青年期である。「私は一体何者なのだ。私は何故に私であるのか。私はどこから来て、どこへ行くのか」ということに回答を得ようとする。それをアイデンティティの形成とよんでいる。その大問題と向き合うためには、「出自」即ち、まずどのようにしてこの世に生まれてきたのかということを知らねばならない。養子や継子やドナーの配偶子や胚の提供で生まれた子どもの『出自を知る権利』とは、そこをまず知らされることから始まる。

その上で、生みの親やドナーを特定す

るところまで行き着かねばならないとする子どもがどれだけ存在するのかは、予測できないことであるが、告知された子どものすべてが生みの親やドナーに会うことを要求するわけではない。養子もすべての養子がルーツを確認するわけではない。これは基本的に非常に個人的な課題なのである。しかし、その課題を解決させなければ自己存在が確立しないと思う人間にとっては、重大問題なのだ。日本は法制化する時、どれだけの人が必要としているのかという多数派原理の議論の仕方をする。しかし、極端な場合一人でもその情報が必要な人がおれば、それが判るシステムが用意されないといけないと思う。世界で初めてAIDにおける子どもの出自を知る権利が法によって保障された「スウェーデンでは、法が施行されてから生まれた子どもが、すでにドナーを特定できる情報を求められる年齢になっているが、まだ一人も名乗り出ていない」²⁰と聞いている。だからこの法律に意味がないということではない。自分の不明な遺伝子の半分をどうでも明らかにしなければならぬと思うのが常に20歳前後であるとは限らないのである。まして、年少の頃から配慮された告知を受けて、親子関係が安定して、いつでも必要な時に情報が得られる環境が整わなければ、敢えてバタバタとしなくても、自分に事実と向き合える心身の用意が整った時に、行動を開始すればいいのである。

5. 告知の必要性

子どもは、自らの意思で生まれてくるものではない。親の子を産もうとする意思決定で以って生まれてくるものである。特に、性交と生殖を分離させるようになってからは、子どもをもつ（もたない）

ということが意図的な行為となってしまった。子どもを何歳の時に産むことにするのか、何人産むのか、加えて妊娠を中絶することも、自己決定できるようになった。子どもを含めた家族を構成する方法としても、あくまでも性交による自然な生殖行為の結果のみとするのか、それが望めない時には生殖補助医療のどの方法によって子どもをもつのか、産まずに養子を迎えるのかということも、それぞれの選択に任されることが可能な社会になっている。子どもをもつという選択をしたとすれば、よほどの事情がない限り、性行為の結果として子どもが生まれてくることを優先させるという順位はあるかもしれないが、選択肢には優劣があるのではなく、あくまでも、選択する人の自由な自己決定権が認められねばならないということであろう。しかし、その結果生まれてきた子どもは、その親のなした選択の結果を運命として受け容れねばならない。だからこそそれを共有できる信頼関係を築くことによってのみ、子どもが自分の運命を肯定できることになる。親となる者の個別な意図による選択でもって、この世に生を受けることになる子どもにとっては、少なくともまず自分の生の始まりについて知らされる必要があるだろう。その選択の自由を認めた社会は、その義務として少なくとも生まれてくる子どもの福祉を最優先にするという責任が付け加えられなければならない。その責任の1ページが、子どもの生を受けた始まりの物語が親から語られるということである。

では、それはどのように語られなければならないかについては、決まった形があるわけではない。100人の親子がいれば100通りの物語が生まれるだろう。

ここで示されるのは、筆者である私が、

私の経験をふまえて、すでに配偶子の提供を受けて生まれた子どもを育てている方々と、これから配偶子・胚の提供治療を受けようと思っている方々に、告知の方法の一例を提案することでしかない。

第Ⅱ章 告知のためのガイドブック（試案として）

私は、40年近く養子縁組にまつわる仕事をしてきました。この間、養親達に「できるだけ小さいうちから養子であることを子どもにうちあけてください。3歳ぐらいになれば十分理解する力が子どもにはあるものです。それから子どもの成長に応じて、その年齢に応じた疑問に、その年齢で判る言葉で話してみてください」と説明してきました。多くの養親がそれを試みて、その報告をしてくださいました。また、うちあけられた子どもの感想や、大人になった養子たちから養子として育ったことをどう受けとめてきたのかを話してもらいました。

その結果、子どもには、私たちが想像する以上に理解力があること、だから決して子どもを侮ることなく、しっかりと向き合って話し合うことが、子どもにとってどんなに大切なことかということを知りました。

偶然、1979年のイギリスの“The Association of British Adoption & Fostering Agencies”が発行している月刊誌「adoption & fostering」の中で「AIDの子どもへの告知」²¹という短い論文を見つけました。約30年も前に養子縁組での研究成果をふまえて、AIDで生まれた子どもにも告知をしたほうが良いという意見が提案されているのに驚きました。イギリスをはじめいくつかの国では養子縁組団体からの指摘で、AID等で生まれた子どもの「出自を知る権利」

についての議論が始まったと聞いています。

これまでの私の経験を踏まえて、配偶子・胚の提供を受けて生まれた子どもの告知について、考えてみたいと思います。養子と配偶子・胚の提供を受けて生まれた子どもとは、非血縁の親子関係が存在するということは共通していますが、すべてが共通しているわけではありません。わからないところは、イギリスのDonor Conception Networkから出版されている「Telling and Talking」²²等から多くを引用しています。その他外国の絵本などを参考にしていますが、諸外国と日本とでは文化も国民性も違いますので、そこも考えながら、私なりの提案をさせていただきたいと思います。

1. 告知をするまえに

告知をするには勇気がいります。うちあけることによって今の関係が変わるのではないか。子どもはどう思うだろう。夫（妻）はどんな気持ちになるだろう。誰でも不安になって、恐ろしくなって、少しでも先延ばしにしようと思ってしまいます。それで当たり前なのです。でも、告知をしようとするなら、準備が必要です。

① 何故子どもが欲しかったのか、その理由・治療を受けた動機を明らかにしましょう

まず、何故配偶子や胚の提供を受けてまで子どもを産もうと思ったのかについて、正直に自分の動機を考えてみてください。本来であれば、治療を受ける前に、このことについてカウンセリングを受けておくべきことです。特に、夫婦間の子どもを産むことが不可能だと診断され、養子をもろうか、第三者からの精子・卵

子・胚の提供を受けるしか方法がないとわかった時点で、改めてもう一度カウンセリングを受けて、この選択によって、将来どういう問題が起きるのか、医学的なこと、夫婦間の了解、家族間の了解、費用のこと、法律や制度について、子どもへの対応の仕方や告知について、そして、あなたがどうしても子どもが欲しいとする背景について明らかにした上で、治療を受けるという決断がなされるべきだったと思います。

そういう風にできた方々については、もう一度子どもを育てる中で、気持ちの変化や考え方の変化はなかったか、夫婦での感じ方に微妙なずれがないか等を確認してみてください。

そうではなかった方、例えば、治療の継続の勢いで、そう深くも考えず医師の勧めるままにに応じてしまった方や、自分は反対だったけれど、配偶者の強い要請に仕方なく応じたという方もおいでになるかもしれません。不妊という思いもかけなかった診断から第三者の配偶子や胚の提供を受けることになった経緯を思い出しながら、心の奥底にしまいこんでいる正直な自分の感情にも向き合ってみましょう。夫婦の遺伝子を引き継いだ子どもを産むことができない悔しさや、喪失感、顔を見れば「孫はまだか…」としか言わなかった親や姑に対する腹立たしさ、女（男）であることを否定されたような屈辱感なども、この際に引っ張り出して整理しておきましょう。養子をもらおうと決めたときも、提供型生殖補助医療を受けると決めたときも、それぞれにエゴイスティックな理由があるものです。その自分自身のエゴに気づき、それを忘れずにいてくださる人が、実は子どもにとって一番良い親だと、私は思っています。「私のためにこの子を必要とした」とい

うことをしっかり自覚しておいてください。その上で、そんなエゴイスティックな理由のために私の子どもにならなければならなかった子どもの立場についても考えてみてやってください。私が生きるためにこの子が必要であったように、この子にはこの子が必要とする人生があるのだということに気づいていただきたいのです。そして、その子どもが自分らしい人生を生ききれるように援助してくれる親が、子どもにとっては一番ありがたい親ではないでしょうか（それが実は難しいことなのですが…）。そのために告知があるのだと思いますし、その告知を自信を持ってするためには、嘆くべきことや悲しむべきことを告知の前にしっかり済ませておくのはとても大事なことだと思います。

「My Choice 不妊治療 わたらしい選択のために」²³という、小さな可愛いピンク色の冊子があります。今治療中の方、これから治療をしようと考えている方にはぜひ読んでいただきたい冊子ですが、自分の気持ちを整理するために治療が済んだ方も読んでみられるのも良いかもしれません。あるいは、未解決の問題があっても自分だけでは整理しがたい時には、夫婦でよく話し合うことなのですが、それが難しかったりするなら、クリニックのカウンセラーや同じ立場の方がいるセルフ・ヘルプグループに参加してみるのも良いでしょう。そして、自分が何に囚われてきたのか、自分の内にある偏見に気づいて、修正しておかないと、告知された子どもが、同じ偏見を持ち、苦しむことになってしまいます。

② 事前に何度も練習をしましょう

子どもが何歳の時に、どんな場面で話すのかを想定して、シミュレーションを

しておくことは有効なことです。本来は、この治療を受ける前に、受けるかどうかの決断ができるかどうかも含めて、“事前研修”を受ける必要があると思います。

「養子を育てたい夫婦のための講座」²⁴を、私達は 20 年以上前から開催しています。そこで、養子を育てるために必要な情報をしっかり学習してもらいます。特に告知については 10 数年前よりロールプレイ取り入れて、実際に告知の場を体験してもらうことにしています。これから配偶子、胚の提供で生まれる子どもの「出自を知る権利」を認めるということは、当然親から告知を受けることが前提になるでしょう。だから治療を受ける前に必ず事前研修ができるシステムが必要だと思っています。現在 AID については、AID のセルフ・ヘルプグループとして「すまいる (AID 親の会)」²⁵が「勉強会」を年に数回開催しています。そこでロールプレイを取り入れたこともありました。また「AID で生まれた子どもの会 DOG」²⁶もできて、講演会やシンポジウムを開催しています。

勿論、事前研修の経験があっても、あなたが告知する前には、練習をしておきましょう。どんな言葉を使って、どんな声で、どんな顔をして話すかを色々工夫してみるのです。どんなに練習をしておいても、本番は練習通りにはいきません。子どもがどうリアクションしてくるのかで、こちらが予測した通りにはなりません。それでも何度もシミュレーションをしておくことは大事です。色々な告知の仕方を見たり読んだり聞いたりすることも有益です。情報は多く仕入れておきましょう。しかし、人まねは駄目なのです。ああでもないこうでもないと繰り返し練習しておいて、当日あなたの口からほとばしり出た言葉が、最も子ども

の心に響く言葉なのです。案外予定していたシナリオとは全く違った表現になることもあります。上手下手ではありません。あなたの言葉で語ることが大事なのです。冷静な気持ちでとっていたのに泣いてしまうかもしれませんし、泣けて、言葉にならないのではないかと思っていたのが、案外すらすらと話せるかもしれません。言葉だけではなくあなたの仕事や表情が言葉以上にあなたの気持ちを伝えていたことになるかもしれません。

③ あなたやあなた方夫婦を支えてくれる人を用意する

告知をしようと決めたら、そんなあなたを支援してくれる人に事前にうちあけておくことも、告知する勇気を支えてもらえます。あなたのことを良く知っていて、当然に治療の経過も話しているような友人や、セルフ・ヘルプグループのメンバーやそれをお世話くださる専門家、治療担当医やカウンセラーも良いでしょう。私は養親から、告知をすると決めた子どもの誕生日の半年前、3ヶ月前、1ヶ月前、3日前などに電話で告知するという決意表明と告知の仕方についての相談を受けたりします。「いついつ告知することにしました」と報告することで、つい先送りしたくなる自分を励ますことにもなりますし、告知すること自体をエンカレッジしてもらうことができます。またこの人は、告知を受けた子どもの支えにもなってもらえる可能性があります。

告知を受けた子どもの年齢によっては、親を疑うという意味ではなく、より確かなこととして受けとめるために、両親でない第三者の話を知りたいという場合もあります。

養子の E 子は、中学 2 年の時に、学校

から母子手帳をもって来るように言われたのです。すでに養子であることは聞かされて知っていたのですが、彼女の母親は14歳で彼女を出産しました。その事はまだ養親も話していませんでした。でも母子手帳を見ればそれも判ってしまいます。養親は母子手帳を前にしてE子にその事実を話しました。するとE子は、このことをお父さんやお母さん以外で知っている人はいるのかと訊いてきたのです。「いるよ。あなたをお世話してくれた岩崎さんなら話を聞いてくれるし、あなたが聞きたい事に答えてくれるでしょう」と説明したところ、E子から連絡が入り、彼女の驚き、中学生の性についての関心、妊娠の可能性など色々話し合い、すっきりした顔で帰っていきました。

2. 告知とは何を伝えることなのか

私は、告知には「真実」と「事実」があると考えています。そして、最初に子どもが聞かされるべきことは「真実」です。真実とは何かというと、「私はこの親達に生まれ、必要とされ、愛されている」ということです。まず、そのことがしっかり伝わって、その子どもの年齢に応じた「事実」の説明がなされることだと思っています。例えば養子なら「お父さんとお母さんの子どもとして、お母さんのおなかから生まれたのではない」という事実だけでいいのです。AIDの場合でも、「どれほどその子どもが待ち望まれていたか、そしてどれほど愛されているかを熱心に明瞭かつ簡潔に伝えることを忘れないように。何故親が妊娠できなかったかについては詳しく話す必要はないのです。」²⁷

まず、どの年齢で話すにしても、こんな風に話してみたらとイギリスの本には書いてあります。「パパとママはずっと親

になりたいと思っていた。でも、そのためには何かの助けがなければ駄目だと言うことがわかったんだ。精子と卵子が一緒になって赤ちゃんができることはおまえも知っているよね。さて、悲しいことに父さんの精子が足りなかったんだ。それで（クリニックや病院）の助けで、ある男性“ドナー”の精子を分けてもらったんだ。おまえがママのおなかにいるってわかった時には、パパとママはなんてラッキーなんだろうって信じられなかったし、おまえが生まれた時には月まで飛び上がるぐらいうれしかったよ。それからずっとおまえを愛してきたし、これからもずっと愛しているよ…」²⁸と。年齢によって、ドナーについての説明が入ったりしていますが、後半の部分がとても大事なところですよ。

養子の告知についてのロールプレイをすると、ほとんどの人が「実は、私達はおまえの本当の親じゃないんだよ」と言ってしまう。そして言ってしまうから「あれ…じゃあ私達はこの子の何なんだ…」とってしまうのです。そう言われると子どもの方も「じゃあこの親は嘘の親か…？」と思います。

私達は、いつの頃からか遺伝上のあるいは生物学上の親を“本当の親”と表現する習慣を持ってしまいました。でも、本当の親とは実際に今その子どもを愛し、育てている人のことではないでしょうか。だから告知は、「私はあなたの生物学上の親ではないけれど、本当の親なんだよ」ということを話すことなのです。ただ、子どもも成長と共にドナーの事を世間で通用している“本当の親”と表現することがあるかも知れませんが、そんなことでうろたえることはありません。子どもは良くわかっているものです。

3. 誰が伝えるのか

勿論両親が揃ってうちあけるべきです。でも実際は母親だけでうちあけている事が、養子の場合も多いのです。どうしても子どもと生活を共にしている時間が圧倒的に父親より母親の方が多という事も大きな理由です。しかし、どうも父親には、逃げ腰になっていたり、話したくないという気弱さがあったりするように感じさせられるのです。しかし、特にAIDの場合には、父親から話すということとはとても大事なことです。

「遺伝的なつながりのない親は、子どもが告知を受けることで子どもから多くを失うのではないかと感じているようです。子どもから拒絶されるのではないかというおそれだけではなく、特に長年知らさないうちあけなければならぬことに脅威を感じる親がいるかもしれません。彼等は、自分自身にも子どもにも、告知が偏見と恥をもたらしのではないかと感じているのかもしれません。こうした感情は良くわかるのですが、父親であれ、母親であれ、だから告知をこの次にするという理由にはなりません。子どもはあなたを必要としているし、あなたと話し合うことを求めています。DC ネットワークの知る限り、子どもに出自を話した大多数の親達の経験では、拒絶は起きなかったと話しています。」²⁹

同席している遺伝上の親(AIDなら母親)も、複雑な気持ちかもしれません。特に告知についてあるいは告知する時期について意見が違っていたり、治療そのものにも双方に温度差があったりした場合には、事前に十分夫婦で話し合い、あるいは信頼できる友人やカウンセラーに相談して、二人の間の問題を先に解決しておくことが望ましいし、告知の仕方や

役割分担を打ち合わせておくと良いでしょう。二人して助け合って告知を成功させなければなりません。

でも、どうしても一人でしなければならないことがあるかもしれません。例えば、すでにどちらかが死亡している、あるいは離婚してしまった場合です。死亡の場合には、親子共に十分悲しさが整理されてからの方が望ましいでしょう。離婚の場合には、離婚の原因の一つに治療した事が含まれているかもしれませんし、子どもの年齢やそれまでの片方の親との関係によっても、告知が子どもに与える影響が違ってきます。しかし、どんな場合も告知の内容は、前記した原則をはずさないでうちあけられることが必要です。卵子や胚の提供によって生まれた子どもの事例がほとんどありませんのでわかりませんが、AIDでは、離婚の事例もよく見聞きします。また、父親の死や離婚が告知のきっかけになりやすいと思われます。夫婦の感情的な問題が告知とともに語られる可能性もありますから、自分の感情の十分な整理が必要になります。また、日本でも離婚後の面会交渉権が認められることが多くなりました。離婚して、AIDの父親が子どもを引き取るということは考えにくいのですが、それでも父親として子どもとの関わりを希望する場合には、告知だけは一緒にするか、相手の同意を得ておくことは必要な事でしょう。

4. いつ告知するのがよいか

基本的には、できるだけ小さい時から告知するほうが、素直に受けとめやすく、それによって傷つくこともありません。私は、ある程度の言語が理解できるようになればということで、養子の場合には3~4歳からできれば小学校の低学年まで

に最初の告知を済ませておくようにと推奨しています。2歳頃から脳の発達が目覚しくて、行動的で、自己主張の強い時期でもあるのですが、それが落ち着く頃から、物事の理解力も増し、情緒の安定も深まります。そして何よりも子どもにとって親が絶対的な存在である時です。そんな時に、また親にとっては子どもが一番可愛く思える時に、親子という基本的な人間の信頼関係を確認し、構築していくために、真実を伝えることが重要だと思うからです。

そして、夫婦関係は勿論、親子関係が良好で、親も子も安定しているとき、楽しいとき、誕生日やクリスマス、お正月というようなお祝いの場面で、家族旅行でリラックスしている雰囲気の中で…おこなわれることが望ましいでしょう。

しかし、現実にはすでに子どもたちは色々な年齢に達しています。それに今までは告知しないことが奨励されていたのですから、これから生まれてくる子どもには幼少時からということも可能ですが、ほとんどの子どもにはその時期が過ぎていることでしょう。

可能であれば、親子関係が最も難しい思春期に告知することは避けたいと思うのです。しかし、この時期が一番子どもも疑問に思う時期であり、ばれる可能性が高い時期でもあります。だから最も知ることが必要な時期ともいえるのですが、精神的には不安定な時期ですから、知りえた事実を受けとめ、整理するという処理能力が伴わない場合が多いのです。

しかし、養子よりも、告知の年齢を考慮するのは、不妊という状態や、そのための治療について説明するためには、性交や妊娠についてある程度の理解ができないと、告知が難しいのではないかと、一般には思われています。そうすると、

中学生か高校生以上ということになってしまいます。

特に、日本では性教育が遅れています。一般の家庭内でも性的なことを話題にすることを極端に嫌がる親が多いように思います。学校でさえ、この10年間に随分性教育が後退してしまいました。このことについては、後に説明することにしましょう。とにかく大事なことは、「あなた自身が性にまつわることを話すのに、汚らしいとかきまりが悪いとか恥ずかしいと思っていると、子どももそう思ってしまうし、あなたが精子や卵子の提供を受けた治療について話す時に、不安で、できることなら隠したいという気持ちでいると、子どもはそんな方法で生まれてきたことが何か悪いことのように受けとめてしまうことになります。あなたの子どもとあなたの子どもを妊娠した方法に愛情と誇り持っていることが重要なのです。」³⁰

その時期（例えば思春期でも）に話すしかないときには、それなりの配慮と工夫をしながら、正しい知識と事実をきっぱりと誠実に話すしかないのです。話すタイミングを良く見計らって、話すときの雰囲気に関心し、話した後のフォローにしっかりと時間を持つことが大切です。

成人している場合も同じです。大人になっていけば理解が進み、了解できるかと期待しがちですが、実際は年齢が大きくなるほど、混乱と怒りが大きくなるのです。F子さんはこう語っています。

「私は、自分がAIDで生まれたことを、結婚も出産も経験したあとの30代に母から聞かされました。いままで『自分』だと認識して生きてきた『自分』と、本当の『自分』をすり合わせることも簡単

ではありませんが、それ以上に、大好きな母に対して“大切な事を長い間教えてくれなかったことへの怒り”を覚えることがつらくてしかたがありませんでした。できれば、小さなころから話してほしかったと思います。(中略)

AIDを選ばれるご夫婦が『子どもには真実を隠す幸せを選ぶ』と言うのを聞くことがあります。けれども、絶対に隠し通せるとはかぎりませんし、もしも子どもが真実を知るときには、親以外の誰かから聞くことは避けるべきだと思います。そして、私がそうだったように、その時期が遅くなるほど子どもはよりいっそう辛さを味わうのではないかと思います。

AIDで生まれた人が、どういう思いを抱えるかということは、いままでに前例のないことです。親も、本人も手探りで歩く道です。その辛さは本人以外の想像を大きく超えるものになるでしょう。AIDを選んでまで得た家族なのですからご夫婦の選択に自信を持ち、子どもの生きる力を信じて小さいころから真実を話してあげてください。」³¹

では、年齢に応じて、どういう告知の仕方ができるのか、外国の事例も参考にしながら考えてみましょう。

5. 年齢別告知の仕方と事例

① 乳児期(0～1歳)

赤ちゃんが無事に生まれてくれたときの感動が、いつまでも続くものではありません。生まれたばかりの赤ちゃんの世話をすることは、新米のお母さんにとってはとても大変なことです。赤ちゃんの泣き声から赤ちゃんの要求を推測してそれに応えるという試行錯誤を繰り返しながら、少しずつ赤ちゃんのニーズを的確に認識し、それに応えられるようになって

て、親しさがまし、密接な交流ができるようになるものです。そうしてだんだんと可愛らしさや愛しさがまして来ります。

「赤ちゃんは、親がだんだん上手になって、特別な赤ちゃん言葉で語りかけてくれるのを聞きながら、親の顔を見つめ、まねることが好きです。あなたが子どもをお風呂に入れたり、寝ている子どもに頬ずりをしたりしているそんなときが、どんなにおまえを愛しているのか、おまえが生まれてくれたからこそ家族を作れたということを話し始めるのにふさわしいのです。こんなに密接なひととき—多分お乳を飲ませていたり、眠りに付く前の子どもを抱きしめていたりする—だからこそ、あなたがどんなに親になりたかったのか、おまえの命をもたらしてくれたドナーの心の広さによってこの機会が与えられたことをどんなに幸運に思っているか、おまえをどれほどいとおしく、どれほど愛しているのかを、優しく語りかけるのです。

赤ちゃんはその言葉の意味を理解するわけではないのですが、こんな風に語りかけられることやお喋りすることを楽しむことで、彼等の脳に親子関係が構築されていくのです。」³²

「Davids氏は、まだ病院にいるときから、赤ちゃんに出生のいきさつを語り始めました。彼は世話をすることに熱中し、父親と息子には、おたがいに強い絆ができました。息子が言葉を理解するようになったとき、父親は、息子が出生のいきさつについては覚えているようには見えませんでした。なによりもお父さんと一緒に何かをすることがとても好きであることに驚きました。」³³

赤ちゃんのときから語りかけることは、このように言葉の意味を理解していなくても、親子関係を深めることになり、これからさきの告知の練習にもなります。しかし、養子の場合には、こんな問題がでてきました。多くの養親は毎日子どもの世話するうちに、その子を我が子のようにというより、我が子として認識していきますから、生んでいないことなんて忘れてしまうのです。ですからこうして語りかけることは、「この子は、養子にももらった子どもなんだと、その都度確認しているようで、侘しくなるのよ…」と訴えてこられます。その気持ちも良くわかるのです。本当に日々親子という信頼を積み重ねているのですから、時には告知されている子どもでさえ、その事を忘れて生活しているものです。でも、折にふれてさりげなく必要に応じて語られていることは、いざというときにうろたえずに済むものです。まして内容は「愛してる」「可愛い」「私の子どもになってくれてありがとう」ということなので、出し惜しみしないでやってほしいものです。

② 幼児期（2～3歳）

この年齢になると、まだまだ親の庇護が必要な時期なのですが、子どもの世界が広がり、親以外の人との出会いや新しい出来事に興味を示し始めます。親にとってみればヨチヨチと動き回るだけでも心配でハラハラしてしまいます。言葉でも行動でもどんどん発達していきます。また、今までなら自分が好きでしていた事を「いや」と言ってみたり、できそうにもない事なのに「自分です」と言って聞かなかったりします。まだ自分の気持ちや身体を自分でコントロールできませんから、彼等自身が欲求不満を感じて

かんしゃくを起こしたりします。だからどうしても親も「駄目です！」と行動を制限してしまうことが増えてくるのです。

「ドナーからの提供で作られた家族においては、自分の子どもをとて愛しているAIDの典型的な父親は、子どもが欲しがるものを与えなかったら、子どもはドナーにあこがれて、自分を拒絶するのではないかと心配してしまうかもしれません。

これはすべての親—ドナーの援助でできた家族だけではなく—にとって、挑戦すべき時期なのです。しかし、小さな子どもが、制限されることがどういうことなのかを理解したときには無事に育つことや、誰が責任を持って育ててくれているのかを知ることは有効なことです。子どもは怒り狂っているときでさえ、制限された枠の中で自分の安全を守ってくれる人として親を信頼するときに、庇護と愛情を感じるものです。子ども達は、彼等の要求を親が圧倒的に崩壊し屈服させてしまう経験をしたときには、庇護を感じたりはしません。この事をよく認識して、すべての父親と母親は、適正な制限枠を明確にし、ヨチヨチ歩きの幼児の要求と感情の爆発を、忍耐と融通性を持ってコントロールするために、親として持っている養育上の権威を使う必要があるのです。」³⁴

「もし、赤ちゃんのときからお話をしていたのなら、子どもがより表情が豊かになり、もっと世界を広げ始められるように、話し続けてください。例えばあなたが車やバスに乗って旅行しているときに、かつてあなたが妊娠していたときに通ったクリニックや病院の前を通り、消防自動車やクレーン車に興味を持たせるのと同じように、『あなたが生まれるのを助けてもらうために、ママが通っていた

病院だよ』と、指差して興味を持たせることができます。

もし、あなたが次の治療のためにクリニックに通っているのなら、あるいは友人が妊娠しているのなら、『赤ちゃんはお母さんのおなかの中で育つよ。でも時々お母さんやお父さんには赤ちゃんを作るための助けが必要なことがあるんだよ』と、話してください。3歳以下の子どもなら、どんな助けが必要なのかという質問をしてくることはめったにありません。しかし、もしあったとしたら、次の年齢のところの記述や、「My Story」³⁵や「Our Story」³⁶の本から言葉を選んでください。」³⁷

こんな風に、イギリスでは、子どもの成長と共に告知をしようと考えているようです。次の3歳・4歳・5歳頃が最初に告知するには最も適した年齢だと、私は思います。養子の場合にも、周りのお友達の家で赤ちゃんが生まれたりすると、必ず興奮して、「私はどうだったのか？」と聞きます。その時が一つの良いタイミングだと思うのです。

③ 幼児期（3～5歳）

この年齢になるとかなりの理解力が出てきますし、絵本を使うことができるようになります。絵本は、とても理解しやすく、何度でも繰り返して読めるので、とても有効です。

「My Story」は、AIDで生まれた子どものための絵本です。「Our Story」は、卵子の提供で生まれた子どものための絵本です。どちらもほとんど同じストーリーです。簡単に説明すると、「お父さんとお母さんはとても愛し合っていたので、かわいい赤ちゃんが欲しいと思った。だけど赤ちゃんは生まれなかった。赤ちゃんはお父さんの精子とお母さんの卵子が

出会って、そしてお母さんのおなかの中で育つ。でもお父さんとお母さんは随分努力をしたけれど赤ちゃんがやってこなかったもので、悲しくなってお医者さんに相談したところ、お医者さんが、親切な男性（女性）から精子（卵子）を分けてくれた。そしてお母さんのおなかの中で、赤ちゃんが育ち、無事に生まれ、お父さんとお母さんはとても喜び、赤ちゃんは家族や友人に祝福されて、家族の一員としての生活が始まった」というお話です。やさしい英語で、可愛い絵がついていて、最後に子どもの写真が貼れるようになっています。

どちらも2～3歳からでも楽しめるようにできていますが、「お父さんの精子とお母さんの卵子とで赤ちゃんができる」と説明しています。「Sometimes it takes three to make a baby」³⁸という本は、3歳～9歳までとしています。ここでは精子・卵子・卵巣・睾丸・子宮という言葉を使っています。

また、これまで引用してきたイギリスの本では、この年齢の告知の例として、次のような表現をあげています。

「・あるお母さんには、赤ちゃんを作るのに十分な卵がありませんでした。それで、別の女性の卵を分けてもらうことが必要なのです。

・お父さんの精子は、お母さんの卵に行き着くほどに早く泳ぐことができませんでした。それで、病院に行って、ある男性が私たちに助けるために精子を分けてくれる事を同意してくれたのです。

・ときには、お父さんには十分な精子がなく、お母さんには十分な卵がなかったので、赤ちゃんを産むためには、別の男性と別の女性からの助けを必要としたのです。」³⁹

さてさて、日本ではここまで簡潔明瞭

に表現することが、この年齢の子どもに対してできる親がどれくらいおられるだろうか、考えさせられます。だからといって、中途半端な表現では、子どもにもっと不可解な、良くないイメージを持たせてしまうことになるでしょう。こういう表現を使うのなら、もっと年齢がいつからでないかと告知はできないと考える人が多くおられるかもしれません。しかし、性の知識については成長とともに個人差が出てきます。却ってこのぐらいの年齢の時には、まださほど差がないときなので、どの子にもしっかりと説明できる方が良いのかもしれない。

「スマイル (AID 親の会)」の勉強会で、一度ロールプレイをしたことがあります。4 歳ぐらいの子どもに告知するという場面でしたが、G さん夫婦にお願いしたときに、G さんは「赤ちゃんができるためには、お母さんの卵にお父さんが魔法をかけるんだよ。だけどお父さんの魔法の力が弱かったので、親切な人がその人の強い魔法の力を貸してくれたんだ。それであなたが生まれたんだよ」と表現しました。その場にいた人はみんな思わず拍手してしまいました。私も、子どもには理解しやすいなかなかステキな表現だと思いました。「あなたいつこんな事を思いついたの？」と G 夫人もびっくりして訊かれたほどでした。「立って前まで歩いていく間にふと思いついたんだ…」と答えていました。しかし、G さんは後になって「本当にこの表現でよかったのだろうか？皆さんは褒めてくれたけれど、これが良い表現かどうか判らないと思う。もっと考えてみることにする…」と言われたそうです。ロールプレイをすることはこうして考えるきっかけになり、とても良いことだと思いますし、もっと子どもに正しくて理解しやすい言葉やストー

リーをそれぞれの人が考えないといけな
いのだと思います。

日本では、小学校の 4 年生になると、思春期における男女の身体の違いという課題で、それぞれにどういう身体の変化が起きるのかについて保健の科目の中で学ぶようです。そこでどうやら【卵子】とか【精子】という言葉や性器の名称が教えられます。その教科書⁴⁰の【卵子】の説明に「赤ちゃんのもとになるもの」という表現が使われています。特に幼児の場合で、どうしても精子や卵子という表現を使いたくない場合には、「お父さんの身体の中にある赤ちゃんのもとと、お母さんの身体の中にある赤ちゃんのもとが会って、命になり、お母さんのおなかの中で赤ちゃんとして育っていく」という説明ではどうでしょうか。

④ 幼児期 (5~6 歳)

5 歳を過ぎると、幼稚園や学校という集団での生活が始まります。この年齢までが告知に適した年齢なのですが、そろそろ人とは違っているということにも理解が及んできます。理解力も一段と進みますから、それだけに準備もより整えておいてください。それでも日本の子どもは外国の子どもと比較すると、前述したように性教育が遅れている分幼い感じがします。絵本などがますます有効な時期です。

但し、養子の場合でもそうですが、3~4 歳の子どもの場合には告知された内容を意外にしっかりと理解している割には、素直に受け入れて、あまり混乱もせず、すぐにいつもの生活に溶け込んでくれるので、告知した親の方が「あれだけ悩んでいますごい決断をして、清水の舞台から飛び降りるような気持ちで話したのに、その甲斐がないと思うぐらいにあっけらか

んとしてくれている」と驚くほどなのですが、5歳を過ぎてくると、時に泣いて「お母ちゃんのおなかから生まれたかった！」と訴えたりします。そこで「お母ちゃんのおなかから生まれたことにしようか」などと言うとすごく嬉しそうな顔をします。そうではないと分かっているからこそ、親子であるというより強い確認として「おなかから生まれたかった」という表現になるのだと思います。そこで「出産ごっこ」のような遊びを繰り返し、繰り返ししてやると、納得してそれがまた親と子の絆を深めているようです。

AID 児なども、告知のあとで、何度も質問したり、同じ話を何度も聞きたがったりするかもしれません。そこから新しい興味が湧いてきて、ドナーについてあるいは「ドナーは精子をどうしてとるの？」とかの質問が出てきたりするそうです。

また、子どもに告知しようと思っていること、あるいは告知したことを、家族や親しい友人に伝えておくことも大事なのですが、話す相手をどこまでに限定するのも、難しい問題です。当然に誰にでもオープンにすることではありません。しかし、この年齢では、さほど考えもなく、あるいは親から話された特別に望まれ愛されている子どもであるということ、幼稚園や学校の友達に話してしまうことがあるかもしれません。それがこの年齢で告知したくないと思う理由の一つでもあります。子どもに家族の中では話しても良いけど、家の外では秘密にしておく事を要求するのは、子どもを混乱させることになります。あるアスペルガー自閉症児についての講演で、「子どもには自分の特有の症状についてよく理解させておく必要があるが、それを誰にでも話すのではなく、自分を理解してもらいた

めにその事を話す必要のある人や、話すことで自分に利益する場合にだけ話すことが大事なのだけれど、それが誰で、どんな場合か分からない時には、親や先生に相談しなさい」⁴¹というアドバイスを聞きました。これは私達の場合にも的確なアドバイスではないかと思います。

そんな事を含めて、私は養親にはいつも「さりげなく堂々としていきましょう」と話しています。

⑤ 小学校低学年（7～9歳）

この年齢の子どもは、一番安定して育っている時期かもしれませんが。まだ親にも十分依存しており、言う事をよく聞いてくれますし、甘えてくれます。家族との外出や、地域での行事にも積極的に参加してくれます。学校生活も特別のことがなければ楽しんでおり、同年齢の子どもと行動を共にする事を喜びます。

小さい時から告知されてきた子どもは、その意味を一層理解することができますが、前項で述べたように学校で性教育を受けて新しい知識を得て、もう少し具体的に考えることができるようになるかもしれません。そのために突然質問してくることがあるかもしれません。

「ネットワークのある父親が、どうやって精子が提供されたのかという息子の問いに率直に答えようと思いました。

金曜の夜、近所のフィッシュ&チップスの店に車を走らせていたときのことで、8歳の息子が突然『お父さん、どうやって精子を提供するの』と訊いてきたのです。私は、これは当然の質問だと考え、彼に説明しました。『ええ！』と息子は言いました。この奇妙な行為は成人男性にとって個人的な楽しみのようなものだと、息子に説明するのは大変でしたが、

一所懸命に説明しようと思いました。」⁴²

こんな風に日本のお父さんも話せると良いですね…。

「この時期に初めて告知しようとしているなら、この最初の部分で説明した、十分な準備と、告知をする時や場面、告知のガイドラインが役に立つでしょう。思春期が始まる前に告知することは、初めてのショックや驚きを比較的簡単に乗り越えられる事を意味しています。繰り返しますが、あなたの自信と安心感と、子どもが必要な時にいつでも喜んで話したいという親の気持ちがあれば、あなたの子どももあなたと同じように感じる事ができるでしょう。」⁴³

⑥ 小学校高学年（10～12歳）

いよいよ思春期前期に入ります。女の子の多くが初潮を迎えますし、男の子の中にも精通を経験する子どもも出てくるかもしれません。しかし、身体的にも知的にも女の子の方が成長が上回る時期です。子どもの気質や性格もはっきりしてきますし、親と似ているとか、似てないという関心も強くなります。明らかに外見上の違いが今まで以上にはっきりしてきます。

すでに告知している場合でも、そういうことから質問が増えるかもしれないですし、だから何も言わなくなる可能性もあります。

「この年齢になると自意識が芽生えてきて、家の外では自分が友達と違うとを感じるようなことを、家庭内ではセックスに関することは話したがりなくなります。男の子は10歳前後には“違う”ということにもっとも敏感になります。女の子は時に違うという事を誇示したが、配偶子・胚の提供を“特別なこと”だと大変ポジティブに捉えることがあります。

子どもの性格や気質や、配偶子・胚提供のことが家庭内でどのように扱われてきたかによるところが非常に大きいのですが、そのことが大変興味を引くトピックになることがあります。

子どもは他の提供によって生まれた子どもとコンタクトを取れる事を期待しているかもしれないし（女の子にその傾向あり）、何の興味もないように見せることもあるかもしれない（男の子にその傾向あり）。この両極端のどちらにあっても、あるいはその間にあることは、極めてノーマルなことです」⁴⁴

この時期に、初めての告知をするのであれば、十分な準備が必要になります。しかし、思春期まえに済ませられるという意味では、はずしたくない時期ではあります。何故今告知しようと思うのかを、短くしっかり伝えられれば良いと思います。特に、身体に変化が現れてきますから、家庭でも性にまつわる会話が増えてきますし、親としては学校だけに任さず、家庭でも正しい性教育が必要になる時期です。こういう面でも日本は外国より遅れているように思えますが、勇気を出して、また親も勉強して、自分の子どもの発達に応じた説明が必要です。そういう意味では、告知するきっかけがつかみ易い時でもあるのです。まだ絵本も有効に使えます。

イギリスの本に、DC ネットワークの告知するきっかけをずっと捜していたJ夫妻が11歳の息子ジャックにAIDとしての彼の始まりを告知する場面が出ています。

「ある夜、3人で居間に座っていました。母親がジャックに『マイ・ストーリー』の本を見せていました。『私達があなたを産むために受けた治療について分かって

もらう助けになるのではないかと買って買った本なの』と説明しました。ジャックは両親と一緒に本を読みました。彼は満足したように見え、何の質問もしませんでした。J夫人は後に『私達は“告知”のプロセスは複雑ではないかと予期していましたが、それまでの数年間の心配は必要なかったようでした』というコメントをしています。

J夫妻は、ジャックが質問してこなかったもので、彼がどれくらい理解しているのかがわかりませんでした。家族でネットワークに参加する前に、息子に自分の命の始まりについてどう理解しているか、それをどのように説明するのかを訊きました。ジャックは大変簡潔に、そして完全に理解していることを説明することができました。会合から帰宅し父親が『おやすみ』と言ったときに、ジャックは急に『僕の大事なお父さんでいてくれてありがとう。とても愛しているよ』と言ったそうです。⁴⁵

これぐらいの年齢の子どもが読むのに適当だと思う「Let Me Explain」⁴⁶という本があります。7～10歳用になっていて、絵もかわいくて暖かな雰囲気の本ですが、割合文字が多いので、10歳ぐらいの子どもにとっても良いと思います。

物語は、8～9歳ぐらいのおてんばな女の子がAIDで生まれたことを、父親からの説明を質問の形にして、お友達に自分で説明するというスタイルで書かれています。

まずとても感動するのは、生まれる前から今までパパが私に何をしてくれたのが詳しく語られていることです。オッチョコチョイで、ユーモアがあって、子ども好きで、子ども思いのお父さんの姿が生き生きと語られていることです。

そして、遺伝とAIDのことについて説明をしてもらっているのですが、面白いのは、「パパの精子はどこが悪かったの？」という質問に、「君の自転車のチェーンが外れた去年の夏の事を憶えているかい？」「ええ憶えているけど、それがパパの精子と関係があるのかな…？私の自転車のチェーンが外れてしまった。パパと私ではめようとしたけどうまくいかなかった。修理屋さんにも持っていったけれど、修理屋さんもやっぱりうまくいかなかった。それにどうしてそうなったのかも分からなかった。だから新しいチェーンを買わないといけなかった」「それと同じなんだ。ただ精子はチェーンを買うようにお店に行くことではないんだけど…」と、いうくぐりでした。精子と自転車のチェーンと一緒にするのか！？と思いますが、その受けとめ方の軽さというか、深刻でないところがいいですね。最後は「結局のところこういうことじゃないかな…。精子が誰から来たとしても、いったんステキな赤ちゃんが育ち始めたら（それは私よ！わかっているよね）、そこにはたった一人のパパしかいないの！」と結んでいます。

この年齢以上になって告知をするということは、どれだけその子どもとそれまでの時間を“親子してきたか”という経過があって、出来ることなのだと思います。

⑦ 中学生から高校生

いわゆる思春期から青年期にいたるこの時期は、まず身体が大きく変化します。そしてそれにもとないホルモンスystemに複雑な変化がおきています。また「思春期は第2の脳の形成期」と言われています。脳の爆発的な発達によるいろいろな感情から、情緒の不安定や『大人に対

する反抗』が現れ、親が頭を抱える時期です」⁴⁷

「一番発達を遂げるのが、脳の司令塔である前頭葉です。前頭葉は過去の記憶と新しい経験を比較して、考えたり、判断したり、決断したり、実行を命令するところです。因果関係がわかり、長期の計画を立て、感情を抑え、行動をコントロールできるのも、前頭葉が十分発達して、大人の脳になってからです。どこから見ても大人だと思える高校生が、首を傾げたくなるような愚かな行為を犯すのは、前頭葉がまだ発達途上なので、知覚情報の統合や感情や行動のコントロールができないからです。」⁴⁸

子ども自身でさえ、自分の心身の変化に振り回されているものですから、いつも苛立っています。しかし、そのことをうまく親に伝えることができません。親からするとあのつい最近までの可愛かった子どもの姿がどんどん失われていくことにあせります。今まで当たり前だった親子の会話がギクシャクし、親にとっては子どもが何を考えているのか分からなくなり、つい親が子どもの行動に逐一介入してしまいやすくなります。そうすると、子どもから怒りの攻撃を受けることになります。自分をとりまく権威や価値観に疑問が生まれ、親への反抗ばかりではなく、社会規範を逸脱する行動にでる子どももいます。そうして親子関係が危機にさらされやすい時期になるのです。

すでに告知を受けている子どもも、あからさまにそのことを持ち出して、親への攻撃にすることがあります。「本当の親ではないくせに…！」と、養子たちも言いますから AID 児たちも言うかもしれません。叱られたときや、自分の要求が聞き入れられなかったときに、よく言います。そういう時期だと理解していても、

親たちは苦痛を感じ、落ち込んでしまいます。しかし、多くの場合、あまり気にすることではありません。確かに、今までの年齢とは違い、自分のルーツに対しても関心が高まっていますし、自分は誰というテーマについても、育て親が自分にとっての親だと思っからこそ、どっぷりとその庇護の下にいるにも関わらず、幻の親（ドナー）への関心や思いがめぐります。肯定的なことばかりではなく否定的なことも思っているようです。中学3年生の男児でちょっとした事件を起こし鑑別所に入っていた養子は、「僕は実親から捨てられたんだ。こんなことをしていたら今の親からも捨てられるかもしれない…」と友人に話していたと、養親の相談の中で聞きました。捨てられるかもしれないと言っている割には、行動を改めるわけでもありませんし、遠慮があるわけでもありません。彼等の複雑な心の状態に気をつけてやることは大事なことです。これまで育ててきた親としての自信をしっかりと持って、「私達はおまえの親だから、こんな事をすれば叱るし、出来ないことは出来ないと言うしかない。しかし決して親としての愛情や責任を放棄はしないのだよ」と、大きな声で言ってやればよいと、私は思います。

かつて、「僕のホンマの母親はおまえみたいなブスと違う…！」と口うるさい養母に言った中学生がいました。養母が泣きながら「憎たらしいでしょ！」と訴えていました。しかし、彼が20歳を越えた頃、その事を彼に訊いてみたところ「僕…そんな失礼なことを申し上げましたでしょうか…？」と答えていましたから、この頃の発言は記憶にさえ残らない程度のことなのだと思います。これは、すでに真実や事実を知らされているからこそ、そして少々何を言っても、今の関係が崩

れるものではないという親への信頼があればこそ、できることだからです。

しかし、これまで秘密を保持されてきたために、子どもに悟られまいとする努力が却って不信感を持たせているかもしれないのに、あるいはそのことに親も目を背けてきたため、すでに何らかの疑いを持ってしまった子どもや、ずっとこの家には何か秘密があるのではないかと感じている子ども達にとっては、この時期はとても苦しい状態になっているかもしれません。

養子のH男は、2歳で引き取られたのですが、すでに6歳前後でもらわれてきた子どもではないかと疑っていました。理由も実に単純なものでした。「友達の親に比べて僕の親は歳をとっているし、友達の親と比べて甘すぎる」ということでした。それで何気なくその事を母親に話したときの母親の一瞬硬直し戸惑った表情から「僕はもらわれてきた子どもなんだ。だけどこれを決して親にも言うてはいけないのだ」と悟ったというのです。そのタブーを持ってしまった子どもの苦しさは、成長するほどに大きく重たくなりました。自分は何者なのかの悩みは、将来の生き方さえ模索できず、高校生になった時には、勉強する意欲もなく、不登校になってしまいました。そんな自分にまるで腫れ物に触るようにおろおろしている親を見ているのも辛くなって、あまり人との接触が少ない深夜のコンビニでバイトをして貯めたお金を持って、家出をしました。でも夜ホテルに落ち着くと、置手紙もしてこなかったことに気づいて、親に「もうその家には帰らないけれど、心配しないでほしい」と電話をいれたのです。電話に出た父は「今から迎えに行く。そこで待っていてくれ」とい

うと、一晩高速をとばして彼を迎えに行き、その帰り道にすべてを説明してやりました。

この時期に告知することは慎重にしなければなりません。この年齢になれば出自を理解する能力は確かに備わっていますが、既述したようなこの時期特有の状況によって、精神面ではまだまだもろいものをもっています。しかし、疑いを持って悩んでいる子どものリスクと事実を知ってのリスクとを天秤にかけてみなければなりません。

親自体が、これ以上秘密を抱えていることに我慢が出来なくなっていることもあるかもしれません。ともかく今話したいと思う理由と、今まで話さなかった理由は何なのかをしっかりと考えてみましょう。ずっと秘密にしておくことがいいと信じてきたことが揺らいでいる原因が、出生にかかわる事以外での問題で、すでに親子関係が危機にさらされているというのであれば（実は親子関係がうまくいっていないときほど、親子間の秘密をばらしたくなるものなのです）、そして子どもには「出自を知る権利」があると思えるのなら、あるいは実際に子どもが明らかに疑いを持っていることが危惧されたり、誰か第三者の口からもれる可能性があったり、遺伝性のない事を伝えるしかない事態が起きているのなら、告知をしたほうが良いと思います。どのみち大人になっていたとしても、告知によるショックが和らぐものではないのです。そのかわりに、子どもとの関係が少しでも安定していて、受験だとか、失恋などで悩んでいたりしていない時を選んで、そして告知後の子どもの疑問にしっかり答えられる時間的余裕をもって、また子どものうろたえにしっかり寄り添える覚悟

と準備をして、できるだけいつもの暮らしの生活空間で話すことが大事です。

イギリスの本にはこんな話し方が紹介されています。

「私と母さんは、君に伝えたいことがあるんだよ。それは、私達家族に君が誕生したときのことなんだ。私と母さんはずっと子どもが欲しいと思ってきたんだ。でも私の精子では子どもが授かることが無理だということが判ったんだ。そしたら病院がドナーの精子を使ってみてはどうかと勧めてくれたんだよ。－それが誰なのかは私達にはわからないんだ－君を授かるために助けてくれたんだよ。母さんが妊娠したと判ったとき信じられないくらい嬉しかったよ。私達はなんてラッキーなんだと思った。君が生まれたとき、私達は天にも昇るほどに幸せだった。君をとっても愛した。それ以来ずっと愛してきたんだ。

でも、このことは君にとって少しショックなことだと思うけれど、でもこれ以上大きくなる前に君にちゃんと知っておいてもらった方がいいと思ったんだ。」⁴⁹

⑧ 成人している場合

実は、成人した子どもへの告知の例文は、上記の例文の下線の部分が次のような言い方になっています。

「でも、このことは君にとって少しショックなことだと想像できるし、もっと前に君に話さなかったことを申し訳なく思っている。私達が病院に通っていた時代には、医者達は子どもがそんなことを知る必要はないと思っていたんだ。でも時代とともに考え方が変わってきたんだ。君が成長途上の時期では話すことがよいという時代ではなかったんだ、けれど今は、私達も君にはこのことを知る権利があると思っているんだ。」⁵⁰になっていま

す。

高校生でも、この例文の方が子どもには理解されやすいかもしれません。

成人していても小学生でも、告知の始まりは、子どもを生みだかったこと、そのために医者勧めたドナーからの提供を受けたこと、それで妊娠できた時にはとても幸運だったと思ったこと、赤ちゃんが生まれたときには天にも昇るほど嬉しかったこと（真実）、を話すということに変わりはありません。年齢が小さいほど、その話を目を輝かせて聞いてくれるでしょう。また生まれた時の状況や、両親や家族の喜び方の逸話を繰り返し、繰り返し聞きたがったりするでしょう。「もういちどききたいな わたしがうまれたよること…」⁵¹というアメリカの絵本があります。養子としてもらうことになっていた赤ちゃんが生まれたという電話を夜中に受けた養親が、驚いて、あたふたと準備し、空港から病院に駆けつけ、家に連れて帰り、家族になる間の出来事を、何度も何度も聴きたがる子どものお話です。翻訳本も出版されています。こんな絵本なら大人になった子どもでも喜ぶかもしれません。

しかし、大人になればなるほど、告知のショックが大きいのです。隠されていたことへの怒りや、そのことで基本的な親への信頼が足元から崩れていく喪失感は、想像以上で当人にしか解らないことかも知れません。

そのためには、告知後のフォローが大切です。まず、真実がしっかり伝えられていたとしても、第三者の精子や卵子や胚によって、自分の命が成り立っているという事実を受け止めるには時間がかかります。伝える親のほうにもつらかった何十年間の複雑な思いがありますから、

お互いに神経過敏になるでしょう。まず、このことについては、いつでもお互いに都合の付く限り何でも話し合うつもりがあることを伝えてください。

特に、AID の場合には、父親にとっては、遺伝子上のつながりがないことを明確にしたことによって、男性不妊だと診断されたときに感じた喪失感を再現させてしまうかもしれません。「特に典型的な男性は、彼等の感情を簡単に話すことはあまりなく、このような不妊症や第三者の配偶子・胚の提供による治療のような痛みを伴う事例については助けを求めることをしません。彼等がそれを長い間隠していた場合は特にそうです」⁵²と、イギリス人の場合にも書いてありますから、日本人の男性ならなおさらのように思います。しかし、逃げないで子どもと向き合って欲しいと思います。あなたの愛情が子どもに届いているかどうかを確認する必要があります。今更そんな照れくさいことは黙っていたいと思うかもしれませんが、イギリス人のように「愛してる」という言い方は出来なくても、「おまえが私の息子（娘）であることをずっと誇りに思ってきた」程度のことは、言っていたきたいように思います。

日本の数少ない AID で生まれた当事者へのインタビュー調査「AID で生まれた子どもの心理」⁵³では、筆者の日下氏は次のように分析しています（調査対象は、調査時点では全員 20・30 歳代で、事実を知った時の年齢と性別は 29 歳時の男性・23 歳時の女性・32 歳時の女性・5 歳時の女性・20 歳時の女性です）。

まず否定的な感情としては、AID で生まれていたという：驚き・困惑・混乱、今まで隠されてきたことへの：怒り・裏切られた感じ・恨み・疑い・不信・悔しさ・苛立ち、自分のルーツの半分が分からない：

不安・寂しさ・悲しさ・喪失感・孤独感、自分が存在してもよいのか：自責感・嫌悪感・辛さなどが聞き取れ、肯定的感情としては、事実を知らされてよかった：安心感・解放感・安堵感、告知後のこじれた関係の修復による：ワクワクする・満たされる、父を理解したい気持ちの芽生え：幸福感などであったそうです。

父親への感情の変化をみると知らされる前より、「オープンになったので、話しやすくなった」「もっと早く知っていたら良い関係が作れた」「愛情を感じられなかったが理解してあげればよかった」「もともと関係が良かったので、変わらない」「より関係が希薄になった」「肩の荷が下りた」等色々ですが、告知前に父親との関係がよくなかった人は、父親への感情が好転していたと言います。

興味深いのは、5 歳で、両親の告知するべきとの考えによって告知された人は、驚きやショックなどの否定的な感情を感じることなくその事実を自然に受け入れており、その後の親子関係も親密で良好に経過したとのことで、出来るだけ小さいうちに告知することの大事さを感じさせてくれるように思いました。

ただ、大事なことは、否定的な感情に捉われても、全員がうちあけられて良かったと思っていることです。

6. ドナーが誰であるか判っている場合の告知

平成 15 年 4 月に出された厚生科学審議会生殖補助医療部会の「精子・卵子・胚の提供による生殖補助医療制度の整備に関する報告書」では、生まれた子どもが提供者を特定できる情報を知ることを請求することが認められていますが、提供を受ける夫婦には誰の精子・卵子・胚であるかについては匿名にされています。

そして当分の間、兄弟姉妹等からの提供は認められないことになっています。しかし、いまだ生殖補助医療を規制する法律がないために、実際には特に親族による提供治療が行われているという事実が、すでに一部では報道されていることから予測されるので、ドナーが、親族である場合や、知人である場合に、告知はどうかあれば良いかについても記述しておきたいと思います。但し、実際の事例を残念ながら私は知りませんので、イギリスのDCネットワークの考え方や症例の部分⁵⁴を要約して紹介することにします。

この冊子の目的は、子どもに自分の始まりについて告知することが目的ですが、子どもの誕生以前に、親とドナーが行った選択の決定が、子どもが告知されたときにどう反応するのかということに関わってきます。即ち、ドナーと子どもとの関係の本質について、関わるすべての人達にはっきりと理解されていなければなりません。例えば、姉(妹)が妹(姉)に卵子を提供した場合、子どもを産んだ人が最初から母親であるということをはっきりさせておくことが重要なことです。卵子を提供した姉(妹)は“特別なおばさん”になるのであって、治療前のカウンセリングによって、彼女がおばさんであり続けられることと、彼女にいかなる理由があろうと、生まれてきた子どもの母親としては認識される必要がないということがはっきりとさせられることが重要です。家族内での提供は、もう一方の不妊家族に共通の遺伝的背景を有する子どもが持てるという意味では、もっとも満足できる方法です。しかしながら、家族のアンビバレンスや対立関係が提供することによってあおられたり、悪く作用したりすることがあることも予測されるので、治療が始まる前にすべての家族メ

ンバーに対してのカウンセリングが絶対に必要です。年月の経過とともに、家族内のメンバーに思いもかけない感情が起きるということもまた珍しいことではないのです。もし、家族の中での役割と責任が明確でなかったとしたら、あなたもドナーもお互いにほんとうはどのように感じているのだろうかとか、提供に関して他にすべきことはないのだろうかとか、悩んでいることでしょう。あなたが支援やカウンセリングを求めることは、家族全員にとって有効なことです。

友人や知人による提供は、素晴らしい祝福にもなるし、悪夢にもなります。それはすべて、当事者たちの理解と、長期間にわたる問題—双方の感情的でかつ実地的な—を、カウンセラーを利用する・しないに関わらず、一緒に探求し続ける彼等の意志によります。

どんな場合であっても、誰であるか判っているドナーの提供によって生まれてきた子どもについて、それを開示することは、子どもの利益になるばかりではなく、関わりあったすべての大人の意思決定を強めることになります。何があったのかについて正直であることは、誰かが意図的にあるいは駆け引きの手段として利用する秘密がないということです。

まだ幼いこの子どもたちに最初に告知をする方法は、匿名のドナーで生まれた子どもの場合と同じです。大事な質問は、いつ子どもにドナーが誰であるかを知らせるべきであるかということです。

ネットワークにおいては、ドナーが誰であるかを知っている家族は、まず誰がドナーだと特定せずに、提供による生殖補助医療によって生まれたという一般的な事実を早い年齢(3歳~5歳)に話すことにしています。それから数年経過して、子どもが提供に誰かが関わっている